

クウォドウルトデウスと『シビュラの託宣』

Quodvultdeus and the Sibylline Oracles

伊 藤 博 明

Hiroaki ITO

カルタゴの司教を務め、454年の末には死去していたクウォドウルトデウス（Quodvultdeus）について、知られていることはきわめて少ない¹。唯一の信頼しうる情報は、おそらくはカルタゴの聖職者であったウィタのウィクトル（Victor Vitensis）が、484年に執筆した『ヴァンダル人の王ゲイセリックとフネリックの治下、アフリカ地方の迫害の歴史』（*Historia persecutionis Africanae sub Geiserico et Hunrico regibus Wandalarum*）における記述である。それによれば、439年10月、ゲイセリック（Geiseric, ca.430-477）に率いられたヴァンダル人がカルタゴを占領した。

それから彼〔ゲイセリック〕は、著名な都市、すなわちカルタゴの、クウォドウルトデウスという名前の、神にも人々にもよく知られた司教と、数多くの聖職者を壊れた船に、裸体のまま、すべてを奪って乗せ、追い払うように命じた。主は、彼らを、自らの善性の憐れみによって、航海を安全なものとして、カンパーニアのナポリにお導きになられた²。

クウォドウルトデウスは、その後はナポリにおいて、454年まで活動したと考えられている。そして、彼は、最晩年のアウグスティヌス

（Augustinus, 354-430）がその書簡において、「愛する息子にして友人の助祭」（*Dilectissimus filius et condiaconus*）と呼びかけている、カルタゴの若き助祭、クウォドウルトデウスと同一視されている。彼とアウグスティヌスの間の書簡は各二通が残されており、428年から429年にかけて交換されている³。

クウォドウルトデウスは最初の書簡（ミーニユ版221番）において、カルタゴの聖職者と俗人の教育に資するために、すべての異端についての要約を作成することをアウグスティヌスに求めた。それへの回答の書簡（222番）において、アウグスティヌスは、すでに執筆されている反異端の文書の編纂者として、ブレッシャのフィラストリウス（*Philastrius Brixiensis*, -ca.397）とキプロスのエピファニウス（*Epiphanius Cyprius*, ca.315-403）の名を挙げている。そして、エピファニウスのギリシア語の作品『パノリオン』（*Panorion*）を良書として推薦し、カルタゴでラテン語訳することを期待して送付するとも述べている。

クウォドウルトデウスは、次のアウグスティヌス宛の書簡（223番）において、理由を挙げつつ、再度、アウグスティヌス自身に執筆を依頼している。というのは、エピファニウスの著作をラテン語に翻訳する適任者がカルタゴでは見いだされず、また、二人の著作家の死後も、新たな異端が現れているからである。結局、アウグスティヌスは、次の書簡（224番）におい

* いう・ひろあき

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授、
芸術論・思想史

て、このカルタゴの助祭の要求に応えるように努力する旨の返答を行っている。アウグスティヌスのこの対応は、クウォドウルトデウスがカルタゴの教会において重要な位置を占めており、将来的には司教に選出されうような人物であったことを推測させる。そして、アウグスティヌスは実際に、全 88 章から成る『諸異端について——クウォドウルトデウスに送る』(*De haeresibus ad Quodvultdeum*)⁴を執筆した(彼の死により未完)。

他方、このクウォドウルトデウスの著作が同定されたのは 20 世紀に入ってからである。1914 年にドン・G・モランは、それまでアウグスティヌスの名前のもとに流通していた 12 の説教的論考をクウォドウルトデウスに帰し、さらに、かつてはアキテーヌのプロスペル(Prosper Aquitanus, ca.390 - ca.455)の名が冠せられていた著作『神の契約と予言の書』(*Liber promissionum et praedictorum*)も彼に帰したのである⁵。その後の議論を経て、モランの提案した説はほぼ受け容れられている。ルネ・マランは、1964 年に『神の契約と予言の書』の校訂版(フランス語訳付)を、クウォドウルトデウスの著作として刊行し、また 1976 年には、12 の説教の校訂版とともに、「キリスト教者著作集ラテン編」(*Corpus Christianorum, Series Latina*)の一冊として、『カルタゴの司教クウォドウルトデウスに帰される著作集』(*Opera Quodvultdeo Carthaginensi episcopo tributa*)を刊行している⁶。

『神の契約と予言の書』は、主として旧約・新約の両聖書からの引用を繋ぎながら、アダムとエバの時代から、最後の審判を経て、永遠の時に至るまでを語った、一種の救済史的な書物である。クウォドウルトデウスは、歴史を「律法の前」(*ante legem*)、「律法の下」(*sub lege*)、「恩寵の下」(*sub gratia*)と、アウグスティヌス的に理解しているが、その終末論的な傾向性が

アウグスティヌスとは異なっている⁷。そして、この著作の中に『シビュラの託宣』からの引用が見いだされるのである。

たとえば、第 3 部「恩寵の下」の第 1 章「ヨハネについての契約が成就される」(*Promissio impleta de Iohanne*)では、『イザヤ書』(40:3-5)の「荒野に呼び声がある……」、『ヨハネによる福音書』(1:19-23)の「これがキリストについてのヨハネの証言である……」、『使徒言行録』(13:25)の「生涯を終えようとするとき、ヨハネは言った……」と、すべて洗礼者ヨハネに関する箇所が引用され、次のように続いている。

そして、エリュトライのシビュラは靈感を受けて、次のように言う。

「裁きの徴として、大地は汗に濡れるだろう」。

「今や、山は大地と等しくなり、青い大海も」。

また、彼女は自ら説明して、こう付け加えている。

「人間の世界には高いものも低いものもなくなるだろう」。

キリストによって果たされたことを、われわれ自身が認識し、そして見る⁸。

『シビュラの託宣』からの 3 行の引用は、元来は『シビュラの託宣』第 8 巻(217-250 行)の、有名なアクロスティック(各行の最初の文字を繋げると「イエス・キリスト、神の子、救世主、十字架」となる)の 1 行(第 8 巻 217 行)、20 行(第 8 巻 236 行)、19 行(第 8 巻 235 行)に該当する⁹。そして、託宣のラテン語訳は、アウグスティヌスの『神の国』(*De civitate Dei*)第 18 巻第 23 章から採られている¹⁰。

また、同じく、『神の契約と予言の書』第 3 巻の第 28 章「主の死に際して、聖なる人々の身体

が復活するという契約が成就される」(Promissio implea qua in morte Domini sanctorum corpora surrexerunt) では、まず、旧約聖書から『イザヤ書』(26:19)の「死者たちが復活し……」という証言が引かれ、次に新約聖書から『マタイによる福音書』(27:51-53)の「大地は震え、岩が裂けた……」以下の、長い引用が見られ、こう続けられている。

そしてパウロも述べている。「あなた方がキリストとともに復活させられたのであれば、上にあるもの求めなさい。そこでは、キリストが神の右側に座しています」[『コロサイの信徒への手紙』3:1]。使徒ペトロもまた証明している。「それゆえ、死者たちにも福音が宣べ伝えられた」[『ペトロの手紙一』4:6]。シビュラも予言している。

「大地は裂け、タンタロスの深淵が現れるだろう」。

「そして、忌まわしいアウェルヌス[冥府]の門を破壊するだろう。

しかし、聖徒たちは身体全体に、自由な光が注がれるだろう¹¹」。

この箇所の『シビュラの託宣』からの引用は、最初の行はアクロスティックの25行(『シビュラの託宣』第8巻241行)に、続く2行はアクロスティックの11・12行(第8巻226-227行)に拠っている¹²。

アウグスティヌスは、『神の国』においては、『シビュラの託宣』の真正性について疑いを抱いておらず、彼女がイエス・キリストについての予言を実際に行ったと考えている¹³。アウグスティヌスは、「アクロスティック」の箇所については、総督のフラキアヌスが彼にもたらした「エリュトライのシビュラの託宣」の、「ある者によるしっかりしたラテン語」によって読んだ

¹⁴。他方で彼は、ラクタンティウス(Lactantius, ca.250-ca.325)の『神学教理』(Divinae institutiones)を通して¹⁵、『シビュラの託宣』について知っており、『神学教理』第4巻に散見される6つの託宣を、全体としてイエスの受難と復活を予言するものとしてまとめている¹⁶。

クウォドウルトデウスは『神の契約と予言の書』において、先に見たように、「アクロスティック」の詩句を分散させて、他の箇所においても利用し、その数は全部で25以上になる¹⁷。他方、アウグスティヌスがまとめた託宣群からも託宣を引いて、10箇所ほどで利用している。たとえば、第3巻第27章「キリストの埋葬について成就された契約」(Promissio impleta in sepulture Christi)では、最初に『詩編』(87:5-6)の「私は望みのない人間のようにになり……」と、同じく『詩編』(16:10)の「あなたは私の魂を冥府に渡すことなく……」が引用され、続いて、マタイや他の福音書記者によって、イエス・キリストの復活について確言されていると説かれ、さらに、使徒パウロの言葉が、『コリントの信徒への手紙一』(15:3-4)から、「私があなたに、第一に私が受けたことを、すなわち、聖書によれば、キリストがわれわれの罪のために死んだこと、埋められたこと、そして、聖書によれば、その三日後の復活したことを伝えました」として引用されている。そして、次のように続く。

そして、シビュラは靈感を受ける。「そして彼[イエス・キリスト]は、三日の眠りを引き受けて死んだままになる」¹⁸。

この引用は、『シビュラの託宣』(8:312)からのもので、アウグスティヌスのまとめた選択群の最後の託宣である。

クウォドウルトデウスにはまた、ラクタンティウスの『神学教理』を直接参照して、『シビュ

ラの託宣』から引用している箇所も存在する。それは、たとえば、彼の別の著作、『五つの異端反駁』(*Adversus quinque haereses*) 第3章に見いだされる。

さらにわれわれは、彼らの予言者であるシビュラが、彼「神の子」について述べていることを聞こう。彼女はこう述べている。

「神は、信じる者たちに、別の神を、崇敬すべき者として与えた」。これらのメルクリウスとシビュラの言葉の中で現れていることを、サベッリウスも確言している。メルクリウスは「父なる神と子」と述べている。そしてシビュラは「別の神」と述べている。……シビュラはこう述べている。

「神の子である、汝の神自身を知りなさい」。この言葉が異教の者とユダヤ人を叱責している。彼女は、別のところで、神の子を、「シュンブロン」(σύμβουλον)、すなわち、忠告者あるいは助言者と呼んでいる¹⁹。

この箇所における『シビュラの託宣』への言及は、以下のように、ラクタンティウスの『神学教理』第4巻6章に拠っている。

エリュトライのシビュラは、彼女の託宣の最初において、至上の神から生まれた、神の子、万人の指導者にして支配者について、以下の詩句において予言している。「万物を養う者、創造者、甘い霊を万人の上に置き、そして、神を万人の指導者にした者よ」。そして、最後にこう予言している。「神は、別の神を、信じる者たちに、崇敬すべき者として与えた」。そして、別のシビュラは、次のことを認識すべきであると教えている。「神の子である、汝の神自身を知りなさい」…… トリスメギストゥスは、彼「神

の子」を「神の造物者」と、シビュラは「シュンブロン」と呼んでいる。というのは、彼は父なる神によって、大いなる知恵と力を授けられ、神は世界の構築において、彼の思慮と手作業を用いるからである²⁰。

『神学教理』における『シビュラの託宣』からの引用は、それぞれ「断片1」(5-6行)、第8巻329行、第8巻264行からのもので、いずれもギリシア語で記されている。クウォドウルトデウスの『五つの異端反駁』における引用はラテン語であるが、文意を正確に表現しており、彼がギリシア語を十分に理解していたことを伺わせる。

さて、ヨーロッパ中世におけるシビュラの伝承においてとくに重要と考えられる作品は、クウォドウルトデウスの『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』(*Contra Iudaeos, Paganos et Arrianos*)である。この著作もまた、中世においてはアウグスティヌスの著作として広く流通していた²¹。

『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』は全体で22章から構成されている。第1章から第6章では、サタンを避けてキリスト教の信仰に忠実であること、洗礼に相応しいこと、三位一体を信じることが勧められる。第7章から第10章では、アリウス派が批判され、子と父の同等性とキリストの処女マリアからの誕生が説かれ、ヘロデの残虐さが断罪される。続く第11章から第18章はユダヤ教徒に向けられており、主として旧約聖書に登場する、ユダヤ人自身の預言者の言葉と、いくつかの異教徒の言葉によって、彼らを説得している。第19章は再びアリウス派に対する批判であり、第20章から第21章までは、信仰のある者たちに永遠の生に備えるように勧めている。

この作品の中で、後代への影響という観点か

ら重要な箇所は、第 11 章から第 16 章までである。というのも、この箇所は 12 世紀以降、すべてが、あるいは部分的に取り出されて、クリスマスの時期の説教として読み上げられたからである。たとえば、アルルではクリスマス当日の朝課、6 時課に、ローマではその前夜の朝課、4 時課に読まれた。またイングランドでは、一般的に、降誕節の第 4 日曜日に読まれた。

本稿の末尾に、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の当該の章の全訳を付するが、ここでは、その概要を紹介したい²²。第 11 章は、ユダヤ教徒に対して呼びかけて、次のように始まる。

ユダヤ人よ、私は敢えて言うが、おまえたちは今日まで神の子を否定している。おまえたちは彼が奇跡を行うのを見て、彼を試そうとして言ったのは、まさに次の言葉ではなかったのか。「いつまであなたは私の心を不安のままにするのですか。もしあなたがキリスト [メシア] ならば、私たちにはっきりと言ってください」(『ヨハネによる福音書』10:24)。すると彼は、おまえたちに奇跡について考えるように促して言った。「私が行う業こそが、私についての証になる」(同 10:25)。すなわち、言葉ではなく行為がキリストの証となるのだ。ところが、おまえたちは、おまえたちの土地の中で救いを行っていた救世主のことを認めずに、悪しざまに断言した。「お前は、お前自身についての証だと言っているが、お前の証は真実ではない」(同 8:13)²³。

続いてクウォドウルトデウスは、ユダヤ教徒の聖典である旧約聖書の中から証人を呼び出し、キリストに関する証言を導き出している。

イザヤよ、キリストについて証を述べなさい。彼はこう言う。「見よ、乙女が男の子を身ごもり、生むだろう。そして、その名前はエンマヌエルと呼ばれるだろう。すなわち、〈神がわれわれと共にいる〉という意味である」(『イザヤ書』7:14；『マタイによる福音書』18:16；『ルカによる福音書』1:31)。また、別の証人を呼び出そう。汝、エレミヤよ、キリストについての証を述べなさい。彼は次のように言う。「この者がわれわれの神であり、彼に並ぶ者はいない。彼以外にはおらず、彼は知恵のすべての道を見だし、そしてそれを、彼の僕のヤコブと自らの愛するイスラエルに与えた」(『バルク書』3:36-38)。見よ、ここに、おまえたちの律法から、二人のふさわしい証人が現れているが、おまえたちの心は彼らの証によって動かされることはなかった²⁴。

第 12 章では、「別のキリストについての証言を律法から導きだした、敵対する者たちの堅固な額を打ち砕くことにしよう」と述べて、ダニエルを招来する。第 13 章では「イスラエルの民の指導者である」モーセ、「忠実な証人」である「聖なる」ダビデ、「預言者」ハバククの証言を語らせている。第 14 章では、「聖なる」シメオン、ザカリアとエリザベトを導きいれ、『ヨハネによる福音書』からの引用と結びつけている。

そして第 15 章は、「ユダヤ人たちよ、これらの言葉でおまえたちには十分ではないのか、おまえたちの律法とおまえたちの民からの多くの証人と証言で十分ではないのか」という言葉から始まって、異教の者たちのある言葉も、イエス・キリストについて証言していることが示される。クウォドウルトデウスは、まず『使徒言行録』(13:46) から、アンティオキアにおけるパウロの説教を引いている。すなわち、パウロ

はユダヤ人たちに対してこう述べる。「あなた方にまず、神の言葉が語られなければならなかったのです。ところがあなた方はそれを拒み、あなた方を永遠の生命に値しない者にしています。そこで私たちは異邦人の方に向いているのです」。そして、異邦人の中からキリストについての証言が為されたことを示そう、と言ってこう続ける。

あの最も雄弁な詩人が自らの詩句において、「今や、新しい子が高き処から遣わされる」と述べたとき、キリストへの証言が与えられなかったであろうか。もしわれわれが、異邦人たちの中から、他の適切な証言や多くの言葉をここに導入しないのであれば、このことも疑われるだろう²⁵。

いうまでもなく、この詩句は、ウェルギリウスの『詩選』第4歌に拠っており、そこでは、この言葉はクマエのシビュラに帰されていたものである。クオードウルトデウスは異教徒のもう1人の例として、新バビロニアの王、ネブカドネツアルを挙げて、『ダニエル書』(3:91-99)からの言葉を引用したのち、次のように述べている。

おお、異邦の者よ、どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたに神の子について告げたのか。いかなる法が、どの預言者があなたに神の子について告げたのか。彼はまだこの世に生まれてはおらず、生まれた者の顔もあなたには知られていなかったのに。どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたにそのことを告げたのか、あなたの内部を神の火が照らして、あなたの下に敵対するユダヤ人たちが捕らわれているときに、このように

あなたが神の子の証言を述べたのでないとするならば²⁶。

そして、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』第16章はすべて、異邦の予言者であるシビュラの言葉に充てられている。その冒頭は次のように始まる。

しかし、二人か三人の証人の口において、あらゆる言葉は確固となるのであり、主ご自身も、あなた方の頑なさを抑えながら、「あなた方の律法の中に、二人の人間の証言は真実である、と書かれている」(『ヨハネによる福音書』8:17)と語ったのであるから、さらに異教徒から第三の証人が導きだされるならば、真理の証言は、あらゆる点において強化されるだろう。シビュラがキリストについて予言しつつ述べたことをわれわれは公にしよう。すなわち、一つの石によって、二つの額が、すなわち、ユダヤ教徒と異教徒が打ちつけられ、そして、ゴリアテのように、その剣によって、キリストの敵どもはすべて刺し殺されたであろう、ということ。シビュラが語ったことを聞きなさい²⁷。

ここで、アウグスティヌスの『神の国』第18巻に挙げられているアクロスティックが全文引用され²⁸、次のようにまとめられている。

これらは、キリストの生誕、受難、復活、そして二度目の降臨について語ったものであり、ギリシア語で各行の冒頭の語を順に辿っていく者は、そこに「イエス・キリスト・テウ・ヒュイオス・ソーテール」、すなわち、ラテン語では「イエス・キリスト、神の子、救い主」を見いだすだ

ろう。そのことはまた、ギリシア文字の特性が十分に認められえないことを除けば、ラテン語に翻訳された詩句においても現れている。キリストの受難をより明瞭に示している、シビュラの別の詩句に熱心に耳を傾けよう²⁹。

これに続いて引用されている言葉は、アウグスティヌスがラクタンティウスの『神学教理』における『シビュラの託宣』からの幾つかの引用をまとめたものである³⁰。このように、クウォドウルトデウスの『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』第16章は、ほぼすべてをアウグスティヌスに負っているのである。

上述したように、『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』の第11章から第16章は独立した作品として、クリスマスの時期に説教として読まれた³¹。そして、12世紀のリモージュの聖マルティアリス修道院では、この説教をもとにして、『予言者たちの行列』(*Ordo prophetarum*)と呼ばれる典礼劇が成立し、ルネサンスに至るまでヨーロッパの各地で、内容は一部異なりながら上演されていった³²。他方、イタリアの美術における最古のシビュラの表現は、南イタリアのベネディクト派のサンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂の壁面に見られるが(11世紀中葉)、その描写への『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』による影響も指摘されている³³。

註

1 クウォドウルトデウスの著作については以下を参照。*Opera Quodvultdeo Carthaginiensi episcopo tributa*, ed. R. Braun, CCSL 60, Turnholt: Brepols, 1976; Quodvultdeus, *Livre des promesses et des prédiction de Dieu*, par René Braun, 2 voll., SC 101-102, Paris: Les Édition du Cerf, 1964; Quodvultdeus, *Promesse e predizione di Dio*, a cura di Antonio V. Nazzaro, Roma: Città Nuova Editrice, 1989; Quodvultdeus of Carthage, *The Creedal of Homilies: Conversion in Fifth-century North Africa*, trans. by Thomas Macy Finn, New York: Newman Press, 2004. クウォドウルトデウスに生涯と思想については以下を参照。René Braun, “Quodvultdeus,” *Dictionnaire de la spiritualité*,

tom.13/2, Paris: Beauchesne, 1986, pp.2882-2889; V. Rossi, “Quodvultdeus,” in *Patrology*, ed. Angelo di Berardino, trans. by P. Solari, Westminster, MD: Christian Classics, Inc., 1987, vol.4, pp.501-503; A. Lippold, “Quodvultdeus. Bischof von Karthago,” in *Paulys Real-encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart: J.B. Metzler, vol.47, 1963, col.1396-1398; Pierre Courcell, “Quodvultdeus redivivus,” *Revue des Études Anciennes*, 67 (1965), pp.165-170; M. Simonetti, “Qualche riflessione su Quodvultdeus di Cartagine,” *Rivista di storia e letteratura religiosa*, 14 (1978), pp.201-207; Michael P. McHugh, “Quodvultdeus,” in *Augustine through the Ages: An Encyclopedia*, general ed. Allan D. Fitzgerald, Grand Rapids, Cambridge: William B. Eerdmans Pub., 1999, pp.693-694; Daniel Van Slyke, *Quodvultdeus of Carthage: The Apocalyptic Theology of a Roman African in Exile*, Strathfield (Australia): St Pauls Publications, 2003.

2 Victoris Vitenis Historia persecutionis Africanae sub Geiserico et Hunrico regibus Wandalarum, 1, 15, ed. C. Halm, MGH, AA 3,1, Berlin: Weidmann, 1879, p.5; Victor Vitenis, *Historia persecutionis Africanae provinciae*, ed. M. Petschnig, CSEL 7, Wien: C. Geroldi Filium Bibliopolam Academiae, 1881, p.8. Cf. John Moorhead, *Victor of Vita: History of the Vandal Persecution*, Liverpool: Liverpool University Press, 1992; Victor de Vita, *Histoire de la persécution vandale en Afrique ...*, par Serge Lancel, Paris: Les Belles Lettres, 2002.

3 Augustinus, *Epistolae*, nn. 221-224, PL 33, cc. 997-1002; CSEL 54, Wien: C. Geroldi Filium Bibliopolam Academiae, 1910, pp.446-454; *Opera Quodvultdeo Carthaginiensi episcopo tributa*, ed. Braun, pp.489-492.

4 PL 42, coll.21-50; ed. C. Beukersm, S.D Ruegg et R. van der Plaetse, CCSL 46, Turnhout: Brepols, 1969, pp.263-345. Cf. L.G. Muller (ed. and trans.), *The “De Haeresibus” of Saint Augustine*, Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 1956.

5 Dom G. Morin, “Pour une future édition des opuscules de saint Quodvultdeus, évêque de carthage au V^e siècle,” *Revue Bénédictine*, 31 (1914), pp.156-162.

6 註1を参照のこと。

7 Cf. Quodvultdeus, *Livre des promesses et des prédiction de Dieu*, “Introduction,” pp.10-113; Quodvultdeus, *Promesse e predizione di Dio*, “Introduzione,” pp.5-39; Van Slyke, *Quodvultdeus of Carthage*; H. Inglebert, “Un exemple historiographique au V^e siècle: la conception de l’histoire chez Quodvultdeus de Carthage et ses relations avec la Cité de Dieu,” *Revue des Études Augustiniennes*, 37 (1991), pp.307-320.

8 Quodvultdeus, *Liber promissionum et praedictorum*, 3, 1, ed. Braun, *Opera*, p.157; *Livre des promesses et des prédiction de Dieu*, pp.502, 504.

9 *Oracula Sibyllina*, ed. Johhanes Geffcken, Leipzig: J.C. Hinrichs, 1902, pp.153-157. 邦訳は佐竹明訳、『聖書外典偽典』6、教文館、1976年、347-348ページ。

10 Augustinus, *De civitate Dei*, 18, 23, ed. B. Dombart et a. Kalb, CCSL 47-48, Turhout: Brepols, 1955, p.613. アクロスティックの全訳は以下のとおり。「裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう。／天から、永遠に支配する王が来るだろう。／すなわち、身体と地上を裁くために現れる。／それゆえ、不信仰者も信仰者も神を見るだろう、／この世の終わりに、聖徒たちとともに高みにおられる神を。／こうして、魂は身体とともに神の前に出て、神が魂を裁くだろう、／大地が繁った茨の茂みに覆われて荒廃したままのときに。／人々の偶像

- も、財産もすべて投げ捨てられるだろう。／火が大地を焼き払い、そして火は大洋と天空まで、／そして、忌まわしいアウェルヌス〔冥府〕の門を破壊するだろう。／しかし聖徒たちは、身体全体に自由な光が／注がれて、永遠の炎が罪人たちに焼き尽くすだろう。／そのとき各々は、隠された所業を明らかし、秘密を／語るだろう。そして神は光へと心を開くであろう。／そのとき悲嘆の声が起り、誰もが歯ざしりをするだろう。／太陽の光輝は奪われ、星辰の輪舞は止むだろう。／天は巻き上げられ、月の輝きも消え、／丘は低くなり、谷が底から持ちあがるだろう。／人間の世界には高いものも低いものもなくなるだろう。／今や、山は平地と等しくなり、青い大海は／すべての動きを止めて、大地は砕かれて消えるだろう。／こうして、泉も河もともに、火によって干上がるだろう。／しかしそのとき、喇叭が悲しい音色を、大地の高いところから／響かせるだろう、悲惨な行為とさまざまな労苦を嘆きながら。／大地は裂け、冥府の深淵が現れるだろう。／そしてそのとき、主の前に王たちは一つとなって立たされるだろう。／天からは火と硫黄の流れが落ちてくるだろう。
- 11 *Liber promissionum et praedictorum*, 3,28, ed. Braun, *Opera*, p.173; *Livre des promesses et des prédiction de Dieu*, pp.542,543.
- 12 *Oracula Sibyllina*, ed. Geffcken, pp.155-156.
- 13 アウグスティヌスと『シビュラの託宣』については以下を参照。K. Prüm, “Das Prophetenamt der Sibyllen in kirchlicher Literatur mit besonderer Rücksicht auf die Deutung der 4. Ekloge Virgilis. I: Theologische Gesichtspunkte. Patristische Grundlagen,” *Scholastik*, 4 (1929), pp.54-77; B. Altaner, “Augustinus und die neutestamentlichen apokryphen Sibyllinen und Sextussprüche,” *Analecta Bollandiana*, 67 (1949), pp.236-248; Jean-Michel Roessli, “Augustin, les sibylles et les *Oracles sibyllins*,” in *Augustine afer*, ed. Pierre-Yves Fux, Jean-Michel Roessli et Otto Wermelinger, Fribourg: Éditions Universitaires Fribourg, 2003, pp.263-286. 伊藤博明「シビュラの行方——アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで——」、『西洋中世研究』、第6号(2014年)、88-112ページ。
- 14 *Ibid.*
- 15 ラクタンティウスは古代の教父の中でも、『シビュラの託宣』を最も積極的に利用した者であった。以下の研究を参照。René Pichon, *Lactance*, Paris: Hachette, 1901, pp.209-213; Robert Maxwell Ogilvie, *The Library of Lactantius*, Oxford, 1978, pp.28-33; Marie-Luise Guillaumin, “L’Exploitation des *Oracles Sibyllins* par Lactance et par le *Discours à l’assemblée des saints*,” in *Lactance et son temps*, ed. par J. Fontaine & M. Perrin, Paris, 1978, pp.189-200; Etienne Wolf, “Lactance et les oracles sibyllins,” in *Les Sibylles*, Nantes: Presses de l’Université de Nantes, 2005, pp.99-106. 伊藤博明「ラクタンティウスと『シビュラの託宣』」、『埼玉大学紀要(教養学部)』、第46巻2号(2010年)、21-37ページ。
- 16 Augustinus, *op.cit.*, p.614. 当該の箇所全訳は以下の通り。「そののち彼は、不信なる者たちの不義なる手に陥る。彼らは、神に対して穢れた手で打ちすえ、汚れた口から毒に満ちた唾を吐く。だが彼は、ただ鞭に聖なる背中を晒す。そして、打たれながら黙する(*Divinae institutiones*, IV, 18, 15. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 287-290,

- ed. Geffcken, p.160)。それは、彼が冥府にいる者たちに語り、棘のある冠を被されたために、「ことば」として来たことも、どこから来たかも人に知らないためである(*Divinae institutiones*, IV, 18, 17. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 292-296, ed. Geffcken, p.160)。彼らは、食物として胆汁を、喉の渇きには酢を与えた。このようにもてなしの悪い食卓を供する(*Divinae institutiones*, IV, 18, 19. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 303-304, ed. Geffcken, p.161)。おまえは愚かにも、死すべき者の心を嘲るおまえの神を認めず、棘のある冠を載せ、苦い胆汁を混ぜた(*Divinae institutiones*, IV, 18, 20. Cf. *Oracula Sibyllina*, VI, 22-24, ed. Geffcken, p.92)。ところで、神殿の帳は裂け、昼の最中に三時間も闇に包まれて夜になる(*Divinae institutiones*, IV, 19, 5. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 305-306, ed. Geffcken, p.161)。そして彼は、三日の眠りを引き受けて死んだままとする。それから彼は、冥府から戻った最初の者として、呼び戻された者たちに復活の始まりを示しつつ、光のもとへやってくる(*Divinae institutiones*, IV, 19, 10. Cf. *Oracula Sibyllina*, VIII, 312-314, ed. Geffcken, p.162)。
- 17 Cf. Van Slyke, *op.cit.*, pp.230-242; Quodvultdeus, *Livre des promesses et des prédiction de Dieu*, “Introduction,” pp. 57-59.
- 18 Quodvultdeus, *Liber promissionum et praedictorum*, 3, 27, ed. Braun, *Opera*, p.172; *Livre des promesses et des prédiction de Dieu*, pp.540, 542.
- 19 Quodvultdeus, *Adversus quinque haereses*, 3,10-13, ed. Braun, *Opera*, p.266.
- 20 Lactantius, *Divinae institutiones*, 4, 6, 5-6, ed. Samvel Brandt, CSEL 19, Wien: C. Geroldi Filium Bibliopolam Academiae, 1890, pp.288-291.
- 21 Cf. Quodvultdeus, *Opera*, ed. Braun, pp.XII-XLIII.
- 22 以下は拙稿「シビュラの行方——アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで——」(註14)の内容と、一部重複しているところをお断りしておきたい。
- 23 Quodvultdeus, *Contra Iudaeos, Paganos et Arrianos*, 11, 1-3, ed. Braun, *Opera*, p.241.
- 24 *Ibid.*, 11, 6-7, pp.241-242.
- 25 *Ibid.*, 15, 4, p.247. 『詩選』の引用は “iam noua proles demittitur alto” であるが、ウェルギリウスのテキストでは “iam noua progenies caelo demittitur alto” である。この箇所については、小川正廣訳、『牧歌／農耕詩』、京都大学学術出版会、2004年、28-32ページを参照。
- 26 *Ibid.*, 15, 7-8, p.247.
- 27 *Ibid.*, 14, 1-2, p.248.
- 28 3行目は、「すなわち、身体において、地上を裁くために現れる」(Scilicet in carne praesens ut iudicet orbem) であるが、アウグスティヌスでは「身体と地上を裁くために」(Scilicet ut canem praesens, ut iudicet orbem) である。“in camem”とする写本も存在する。
- 29 *Ibid.*, 16, 4-6, p.24.
- 30 アウグスティヌスのテキストと異なるのは、1行目の「不信なる者たちの手に」(In manus infidelium) が、アウグスティヌスでは「不信なる者の不義なる手に」(In manus iniquas infidelium) となる箇所と、11行目の「死すべき者の感覚を」(mortalium sensibus) が、アウグスティヌスでは「死すべき者の心」(mortalium mentibus) となる箇所である。後者については、クウォドウルトデウスのある写本においては「死すべき者の心」と訂正されており、ミニーヌ版もそれに従っ

ている。

- 31 Cf. Karl Young, *The Drama of the Medieval Church*, Oxford: Clarendon Press, 1933, vol.2, pp.126-137.
- 32 Cf. Ibid., pp.138-145; Idem, "Ordo prophetarum," *Transactions of the Wisconsin Academy of Science, Arts and Letters*, 20 (1922), pp.1-82 ; Richard B. Donovan, *The Liturgical Drama in Medieval Spain*, Toronto: Pontifical Institute of Medieval Studies, 1958, pp.146-156; Lynette R. Muir, *The Biblical Drama of Medieval Europe*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995, p.84.
- 33 Cf. Dorothy F. Glass, "Pseudo-Augustine, Prophets, and Pulpits in Campania," *Dumbarton Oaks Papers*, 41 (1987), pp. 215-226.

翻訳 クウォドウルトデウス『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』第11-16章¹

第11章

ユダヤ人よ、私は敢えて言うが、おまえたちは今日まで神の子を否定している。おまえたちは彼が奇跡を行うのを見て、彼を試そうとして言ったのは、まさに次の言葉ではなかったのか。「いつまであなたはわれわれの心を不安のままにするのですか²。もしあなたがキリスト〔メシア〕ならば、私たちにはっきりと言ってください」(『ヨハネによる福音書』10:24)。すると彼は、おまえたちに奇跡について考えるように促して言った。「私が行う業こそが³、私についての証になる」(『ヨハネによる福音書』10:25)。すなわち、言葉ではなく行為がキリストの証となるのだ。ところが、おまえたちは、おまえたちの土地の中で救いを行っていた救世主⁴のことを認めずに、悪しざまに断言した。「おまえは、おまえ自身についての証だと言っているが⁵、おまえの証は真実ではない」(『ヨハネによる福音書』8:13)。

この言葉に対して、彼がおまえたちに答えることも、おまえたちは気に留めることはないだろう。彼は言った。「あなた方の律法に、二人の人間の証が真実であると書かれていないだろうか⁶」(『ヨハネによる福音書』8:17)。律法に背反する者たちよ、律法に心を向けよ。あなた方はキリストについての証を求めよ。あなた方の律法には、二人の人間の証が真実であると記されている。律法からは二人のみならず、キリストについて多くの証人が現れるだろう、そして、律法を行う者ではなく、それを聴いている者を挫くだろう⁷。

イザヤよ、キリストについて証を述べなさい。彼はこう言う。「見よ、乙女が身ごもり、男の子を生むだろう。そして、その名前はエンマヌエ

ルと呼ばれるだろう」(『イザヤ書』7:14)。「すなわち、〈神がわれわれと共にいる〉という意味である」(『マタイによる福音書』1:16)⁸。また、別の証人を呼び出そう。汝、エレミヤよ、キリストについての証を述べなさい。

彼はこう言う。「この者がわれわれの神であり、彼に並ぶ者はいない。彼以外にはおらず、彼は知恵のすべての道を見だし、そしてそれを、彼の僕のヤコブと自らの愛するイスラエルに与えた」(『バルク書』3:36-38)。見よ、ここに、おまえたちの律法から、二人のふさわしい証人が現れているが、おまえたちの心は彼らの証によって動かされることはなかった。

第12章

さてわれわれは、別のさまざまなキリストについての証言を律法から導きだして、敵対する者たちのきわめて堅固な額を打ち砕くことにしよう。年齢の点では若いが、知識と寛大さの点では老いている、あの聖なるダニエルを招来し、あらゆる誤った証言を打ち破らせよう。恥ずべき老人たちを打ち負かしたように、彼のキリストについての証言によって、敵対する者たちを打ち砕かせよう⁹。

語りなさい、聖なるダニエルよ、キリストについて汝が知っていることを語りなさい。彼はこう言う。「最も聖なる者が来るとき、塗油を終えるだろう」(『ダニエル書』9:24)¹⁰。彼が現れたとき、おまえたちは彼を愚弄してこう言った。「おまえは、おまえ自身についての証だと言っているが¹¹、おまえの証は真実ではない」(『ヨハネによる福音書』8:13)。だがどうして、来た者自身が最も聖なる者でなかったのならば、おまえたちの塗油を終えたのであろうか。おまえたちが述べているように、もし彼がまだ来ていなくて、最も聖なる者の来ることが期待されているのならば、おまえたちの塗油を示しなさい。

他方、もしおまえたちの塗油を終えたのならば——これは真実なのだが——、最も聖なる者が来たことを認めなさい。

たしかに、彼は、切り出す者の「手によらずに、山から切り出された石」(『ダニエル書』2:34)¹²、すなわち、抱く者たちの手を煩わせずに処女から生まれたキリストであり、「山が大いに成長して、大地の面をすべて覆う」(『ダニエル書』2:35)¹³までに成長した。この山についてある預言者はこう述べている。「来なさい、われわれは、主の山に登ろう」(『イザヤ書』2:3)。それについてダビデはこう述べている。「神の山、豊かな山。なぜあなた方は、この峰重なる山を、神がそこに住むことを好んだ山々を疑うのか」(『詩編』67:16-17)¹⁴。

たしかに、主であるキリスト御自身が、彼の弟子たちに対して、誰のことを「人の子」と呼んでいるのかと尋ねたとき、彼らは、「ある者たちはエリヤと、ある者たちはエレミヤと、ある者たちは預言者たちの一人」(『マタイによる福音書』16:14)と答えた。そして、この者は言った。「なぜあなた方は、この峰重なる山を、神がそこに住むことを好んだ山々を疑うのか」(『詩編』67:17)。

ペトロもこのことを知っていて、こう語った。「あなたはキリスト、生きる神の息子です」(『マタイによる福音書』16:16)¹⁵。彼は山のことを知り、山へ登った。彼は真理の証を述べ、真理から愛された。ペトロが石〔ペトラ〕の上に置かれたのは¹⁶、彼が恐れゆえに三度否定した者¹⁷を愛しつつ、死を受け入れるためだった。

第13章

そして汝、律法者であり、イスラエルの民の指導者であるモーセよ、キリストの証言を語りなさい。「神はあなた方の兄弟たちから、預言者をあなた方に対して立ち上がらせるだろう」

（『申命記』18:15）¹⁸。「預言者に耳を傾けない魂はすべて、自らの民から追放されるだろう」

（『申命記』18:19）¹⁹。ところで、キリストと呼ばれる預言者に、福音においてキリスト御自身に耳を傾けよう。彼はこう言った。「預言者は、祖国以外においてならば、敬意を払われぬことはない」（『マタイによる福音書』13:57）。

さらに、聖なるダビデを、忠実な証人を呼びだすことにしよう。彼の種子から、律法と預言が証を述べている対象である、あの方が進みでたのである。彼自らに、キリストについて語らせることにしよう。彼はこう言った。「地上のあらゆる王が彼を敬い²⁰、あらゆる民が彼に仕えるだろう」（『詩編』71:11）。誰に仕えるのだろうか。さあ、誰に仕えるのだろうか。あなたは、誰に仕えるかを聞きたいだろうか。「主はわが主に向かつて言った。汝はわが右側に据わるように、私が汝の敵たちを汝の足下に置くまでは」

（『詩編』109:1）。そして、彼はより明確に、名前を挙げてこう言っている。「なぜもろもろの国は騒ぎたて、もろもろの民は無益なことを案じたのか。地上の王たちは立ち上がり、君主たちは一致して主に、そして彼の油を注がれた者[キリスト]に敵対した」（『詩編』2:1-2）。

別の証人を呼びだすことにしよう。汝、預言者ハバククよ、キリストについての証言を語りなさい。彼はこう言った。「主よ、私はあなたの御業を聞き、怖れました。神よ、私はあなたの御業について考え、怖れました」（『ハバクク書』3:2）²¹。彼は、以下のいかなる業を見て怖れたのだろうか。宇宙の仕組みに怖れたのだろうか。そうではない。彼が怖れたものを聞きなさい。彼はこう言った。「二匹の獣の間に、あなたは認められるだろう。神よ、汝の御業によって、ことばは肉となった」²²。

二匹の獣の間に、あなたは認められるだろう。だがあなたは誰で、どこから降り立ったのだろ

うか。あなたは私を恐れさせた。すなわち、万物を造った「ことば」²³が飼い葉桶に横たわっていた。「牛は自らの飼い主を、驢馬は自らの主人の飼い葉桶を知っている」（『イザヤ書』1:3）。二匹の獣の間に、あなたは認められるだろう。

「二匹の獣の間に」とは、二つの契約の間に、あるいは二人の泥棒の間に、あるいはモーセと、山上で彼と会話したエリヤの間に²⁴、という以外のことだろうか。彼はこう言った。「ことばは歩きまわり、平野へと出た」。「ことばは肉となり、われわれの間に住んだ」（『ヨハネによる福音書』1:14）。エレミヤもこう述べている。「こののちに、彼は地上に現れて、人々と交わった」（『バルク書』3:38）。

このように、いかに真理の証言は互いに一致していることだろうか。このように、いかにそれらは虚偽の子たちを論駁したことだろうか。ユダヤ人たちよ、おまえたちにはこれらで十分であろう。それとも、おまえたちの困惑に対して、おまえたちの律法と民から、別の証言を導き入れることにしようか。というのも、それらは、おまえたちが心を失い、嘲って「あなたはあなた自身について証しているが、あなたの証は真実ではないだろう」（『ヨハネによる福音書』8:13）²⁵と述べたことに対して証言をもたらすからである。だが、もし私が律法と預言者たちから、キリストについて語られた事柄をすべて集めようとするならば、その豊饒さに対して時間が足りなくなるだろう。

第14章

ところで、おまえたちの民の中から生まれ、しかしおまえたちの誤謬の中に見捨てられなかった、かの老人、聖なるシメオンをあなたの方の中に導き入れよう。彼は、真の光を見るまでは、この世の光の中で年老いていくままだった。すでに年齢は彼が逝くにふさわしかったが、しか

し、彼が来ることを知っていた者を認めることを期待していた。というのも、この老人は聖霊によって、神のキリストを見て、その生誕を確認し、彼が神殿に進むまでは死なないと告げられていたからである。

たしかに、彼はキリストが母の腕に抱かれていること見て、そして、経験な老人は神の子を知り、自らの腕に幼児を取り上げた²⁶。たしかに彼はキリストを運んでいたが、キリストがこの老人を導いていた。運ばれていた者が導いていたが、それは老人が、約束の成就の前に身体から引き離されないがためであった。しかし、彼が述べたことを、彼が告白した者のことを、キリストではなく自分自身に敵対する者たちよ、聴きなさい。この老人は神を誉め讃えながら叫んで、こう言った。「主よ、今やあなたは、あなたのお言葉どおりに、あなたの僕を安らかに去らせてくださいます。というのは、私の眼があなたの救いを見たからです」(『ルカによる福音書』2:29-30)。

さらに、ヨハネの両親である、若い時には適わなかったが老年になって子を授かったザカリアとエリザベトに、キリストについての証言を語らせよう。彼らがキリストについて述べたことを語らせ、キリストについての適切な証人としよう²⁷。というのも、彼らは自らの生まれた子にこう言ったからである。「幼子よ、おまえはいと高き者の預言者と呼ばれるだろう。主に先だって歩み、主の道を準備するからだ」(『ルカによる福音書』1:76)そして、処女である母自身にエリザベトはこう言った。「私の主の御母が私のところに来てくださるとは、いったいどうしたことでしょう。あなたの挨拶の声が私の耳に入ったとき、私の体内で子どもが喜んで跳びました」(『ルカによる福音書』1:43-44)。

というのは、ヨハネは、自らの主の御母が来たのが分かったが、しかしまだ狭い体内にいた

ので、声では挨拶できないがゆえに動きによって挨拶したのである²⁸。先駆者でかつ友であり、へりくだった、最も忠実な僕であるヨハネ自身がのちに適切な語ったことは、女たちから生まれた者たちの間で——彼が本当はそうではない者と見なされたがゆえに——最も適切な証人に彼をしたのではなかろうか。というのも、ユダヤ人は彼をキリストと信じていたのだが、彼は自らそのような者ではないと叫んで、こう言ったからである²⁹。「私は、あなた方が思っているような者ではない。その方は、私のあとに来るのであり、私はその方の足元で、履き物の紐を解くほどの値打ちもない」³⁰。

おお、忠実な証人よ、真の花婿の友よ、あなたはもし、彼の履き物の紐を解くには値しますと述べたとしても、大いに自らをへりくだらせたことになっただろう。しかし、あなたはその値打ちもないと述べたとき、誤った証人のユダヤ人たちに反駁したのである。あなたがこのように語ったのは、あなたがキリストを見る前のことだった。そして、あなたのもとに、崇高なあなた自身が、自らの務めを成就するために、自らはあらゆる罪から逃れているにもかかわらず、へりくだって、あなたから洗礼を受けたときに、あなたが問うたことを、あなたが見分けた方を、あなたが述べた証言を、敵対する者たちは、否応がでも聞くことになったのである。彼はこう言った。「見よ、神の子羊だ、世の罪を除く者だ」(『ヨハネによる福音書』1:29)。そして付け加えた。「あなたは私から洗礼を受けるために来られましたが、私があなたから洗礼を受けるべきなのです」(『マタイによる福音書』3:14)³¹。

僕は主を見分けた。原罪の鎖に繋がれている者は、罪のあらゆる結び目から逃れている者を見分けた。告知者は裁き主を見分けた。被造者は創造者を見分けた。花婿の介添え人には花婿

を見分けた。それゆえ、ヨハネはこう語ったのである。「花嫁を迎えるのは花婿である。花婿の友は傍らに立ち、耳を傾け、花婿の声を聞いて大いに喜ぶ」(『ヨハネによる福音書』3:29)。

第15章

ユダヤ人たちよ、これらの言葉でおまえたちには十分ではないのか、おまえたちの律法とおまえたちの民からの多くの証人と証言で十分ではないのか。まだおまえたちは、恥知らずにも、他の民や民族の者たちがキリストへの証言を提供しなければならないなどと言おうとしているのか。もしそのように言うのであれば、あの方はおまえたちにこう答えるだろう。「私はイスラエルの家の失われた羊のために遣わされてはいない」(『マタイによる福音書』15:24)。そしてパウロは『使徒言行録』において、あなたたちを叱責して、こう言うだろう。「あなた方にまず、神の言葉が語られなければならなかったのです。ところがあなた方はそれを拒み、あなた方を永遠の生命に値しない者にしています。そこで私たちは異邦人の方に向いているのです」(『使徒言行録』13:46)。われわれは、異邦人の中からキリストに証言が述べられたことを証明しよう。というのは、真実は無言でおらず、それと敵対する言葉を通してさえも叫ぶからである。

あの最も雄弁な詩人が自らの詩句において、「今や、新しい子が高き処から降る」(ウェルギリウス『詩選』4:7)と述べたとき、キリストへの証言が与えられなかったであろうか。もしわれわれが、異邦人たちの中から、他の適切な証言や多くの言葉をここに導入しないのであれば、このことも疑われるだろう。

おまえたちを捕らえて、おまえたちの傲慢さを従わせたあの王、すなわち、バビロニアのネブカドネツアルをわれわれは見過ごさないことにしよう。ネブカドネツアルよ、語れ、あなた

が正しい三人の者たちを不正にも炉に投げ込んだとき、その中に何を見たのかを。語れ、あなたに何が明らかにされたのかを。彼は側近の者たちにこう言った。『われわれは、あの三人の者たちを縛りあげて炉の中に投げ入れたのではなかったのか』。彼らは彼に言った。『王さま、その通りです』。彼は言った。『見よ、私は四人の者が火の中を自由に、しかも何の傷も受けることなく歩き回っているのを見ている。そして、四人目の顔は神の子に似ている』(『ダニエル書』3:91-92)。

おお、異邦の者よ、どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたに神の子について告げたのか。いかなる法が、どの預言者があなたに神の子について告げたのか。彼はまだこの世に生まれてはおらず、生まれた者の顔もあなたには知られていなかったのに。どうしてあなたにはこのことが起こったのか。誰があなたにそのことを告げたのか、あなたの内部を神の火が照らして、あなたの下に敵対するユダヤ人たちが捕らわれているときに、このようにあなたが神の子の証言を述べたのでないとするならば。

第16章

しかし、二人か三人の証人の口において、あらゆる言葉は確固となるのであり、主ご自身も、あなた方の頑なさを抑えながら、「あなた方の律法の中に、二人の人間の証言は真実である、と書かれている」(『ヨハネによる福音書』6:17)

³²と語ったのであるから、さらに異教徒から第三の証人が導きだされるならば、真理の証言は、あらゆる点において強化されるだろう。シビュラがキリストについて予言しつつ述べたことをわれわれは公にしよう。すなわち、一つの石によって、二つの額が、すなわち、ユダヤ教徒と異教徒が打ちつけられ、そして、ゴリアトのよ

うに、その剣によって、キリストの敵どもはすべて刺し殺されるだろう³³、ということを。シビュラが語ったことを聞きなさい³⁴。

裁きの徴として、大地は汗で濡れるだろう³⁵。

天から、永遠に支配する王が来るだろう³⁶。すなわち、身体において、地上を裁くために³⁷ 現れる³⁸。

それゆえ、不信仰者も信仰者も神を見るだろう³⁹、

この世の終わりに、聖徒たちとともに高みにおられる神を⁴⁰。

こうして、魂は身体とともに神の前に出て、神が魂を裁くだろう、

大地が繁った茨の茂みに覆われて荒廃したままのときに⁴¹。

人々の偶像も、財産もすべて投げ捨てられるだろう⁴²。

火が大地を焼き払い、そして火は大洋と天空まで⁴³、

そして、忌まわしいアウェルヌス〔冥府〕の門を破壊するだろう。

しかし、聖徒たちは身体全体に、自由な光が⁴⁴

注がれて、永遠の炎が罪人たちを焼き尽くすだろう⁴⁵。

そのとき各々は、隠された所業を明かし、秘密を

語るだろう。そして神は光へと心を開くであろう。

そのとき悲嘆の声が起こり、誰もが歯ざしりをするだろう。

太陽の光輝は奪われ、星辰の輪舞は止むだろう。

天は巻き上げられ、月の輝きも消え、

丘は低くなり、谷が底から持ちあがるだろ

う⁴⁶。

人間の世界には高いものも低いものもなくなるだろう⁴⁷。

今や、山は平地と等しくなり、青い大海は⁴⁸すべての動きを止めて、大地は碎かれて消えるだろう。

こうして、泉も河もともに、火によって干上がるだろう。

しかしそのとき、喇叭が悲しい音色を、大地の高いところから

響かせるだろう、悲惨な行為とさまざまな労苦を嘆きながら。

大地は裂け、タンタロスの深淵が現れるだろう⁴⁹。

そしてそのとき、主の前に王たちは一つとなって立たされるだろう。

天からは火と硫黄の流れが落ちてくるだろう。

これらは、キリストの生誕、受難、復活、そして二度目の降臨について語ったものであり、もしギリシア語で各行の冒頭の語を順に辿っていく者は、そこに「イエス・キリスト・テウ・ヒュイオス・ソーテル」⁵⁰、すなわち、ラテン語では「イエス・キリスト、神の子、救い主」を見いだすだろう。そのことはまた、ギリシア文字の特性が十分に認められえないことを除けば、ラテン語に翻訳された詩句においても現れている。キリストの受難をより明瞭に示している、シビュラの別の詩句に熱心に耳を傾けよう⁵¹。

そののち彼は、不信なる者たちの手に⁵² 陥る。彼らは、神に対して穢れた手で打ちさえ、汚れた口から毒に満ちた唾を吐く。だが彼は、ただ鞭に聖なる背中を晒す。そして、打たれながら黙する⁵³。

それは、彼が冥府にいる者たちに語り、棘のある冠を被されたために、「ことば」として来たことも、どこから来たかも人に知られないためである⁵⁴。

彼らは、食物として胆汁を、喉の渇きには酢を与えた。このようにもてなしの悪い食卓を供する⁵⁵。

おまえは愚かにも、死すべき者の感覚を⁵⁶嘲るおまえの神を認めず、棘のある冠を載せ、苦い胆汁を混ぜた⁵⁷。

ところで、神殿の帳は裂け、昼の最中に三時間も闇に包まれて夜になる⁵⁸。

そして彼は、三日の眠りを引き受けて死んだままとなる。それから彼は、冥府から戻った最初の者として、呼び戻された者たちに復活の始まりを示しつつ、光のもとへやってくる⁵⁹。

註

1 底本としては以下を用いた。

Quodvultdeus, *Contra Iudaeos, Paganos et Arrianos*, ed. R.Braun, in *Opera Quodvultdeo Carthaginiensi episcopo tributa*, Corpus Christianorum, Series Latina 60, Turnholt: Brepols, 1976.

邦訳にあたっては、次の英訳を参照した。

Edward Noble Stone, "A Translation of Chapters XI-XVI of the Pseudo-Augustinian Sermon against Jews, Pagans and Arianos, Concerning the Creed," *University of Washington Publications in Language and Literature*, 4, 3 (March, 1928), pp.195-214.

- 2 ウルガタ版では、「私の心を耐え忍ばせるのですか」。
- 3 ウルガタ版では、「私が父の名において行う業こそが」。
- 4 『詩編』73:12を参照。「わが王である神は、始めから、地上の中で救いを行っていました」。
- 5 ウルガタ版では、「主張しているが」。
- 6 ウルガタ版では、「書かれているではないか」。
- 『箴言』19:15、『マタイによる福音書』18:16、『コリント人への手紙二』13:1、『ヘブライ人への手紙』10:18を参照。
- 7 『ローマ人への手紙』2:13を参照。「律法を聞く者が、神のもとで義とされたのではなく、律法を行う者が義とされるだろう」。
- 8 『ルカによる福音書』1:31を参照。「見よ、あなた〔マリア〕は身ごもり、男の子を生むだろう。そしてその名をイエスと呼ぶだろう」。
- 9 『ダニエル書』13:47-61を参照。
- 10 ウルガタ版では、「……永遠の正義がもたらされ、幻

と預言が満たされ、最も聖なる者が油を塗られるだろう」。

- 11 ウルガタ版では、「主張しているが」。
- 12 ウルガタ版では、「人の手によらずに石から切り出され」。
- 13 ウルガタ版では、「山は大いに成長して、大地をすべて覆った」。
- 14 ウルガタ版では、「神の山、豊饒な山、連結した山、豊饒な山。なぜあなたは、連結した山々を、神がそこに住むことを喜んだ山を疑うのか」。
- 15 『マルコによる福音書』8:29、『ルカによる福音書』9:20、『ヨハネによる福音書』6:70を参照。
- 16 『マタイによる福音書』16:18を参照。「私もまたあなたに言う。あなたはペトロ〔岩〕だ。そして私は、この岩の上に私の教会を建てよう」。
- 17 『マタイによる福音書』26:34、『マルコによる福音書』14:30、『ルカによる福音書』23:34を参照。
- 18 ウルガタ版では、「あなたの神である主は、あなたの民とあなたの兄弟から、私のような預言者をあなたに対して起こすだろう」。
- 19 ウルガタ版では、「しかし、彼が私の名のもとに話す言葉を聞こうとしない者に対しては、私は罰する者となるだろう」。
- 20 ウルガタ版では、「あらゆる王が彼を敬い」。
- 21 ウルガタ版では、「主よ、私はあなたの声を聞き、怖れました。主よ、あなたの御業が、数年の内にそれを甦らせ、数年の内にそれを知らしめてください。あなたが怒るときにも、憐れみを覚えてください」。
- 22 『ヨハネによる福音書』1:14を参照。「ことばは肉となり、われわれの間に住んだ。そしてわれわれは、彼の栄光を、いわば父からのひとり子の栄光を見た。彼は恵みと真理に満ちていた」。
- 23 『ヨハネによる福音書』1:3を参照。
- 24 『マタイによる福音書』17:3を参照。
- 25 ウルガタ版では、「あなたはあなた自身について証を与えているが、あなたの証は真実ではない」。
- 26 『ルカによる福音書』2:25-28を参照。
- 27 『ルカによる福音書』1:5-25を参照。
- 28 『ルカによる福音書』1:41を参照。
- 29 『ルカによる福音書』3:15を参照。
- 30 『マタイによる福音書』3:11、『マルコによる福音書』1:7、『ルカによる福音書』3:16、『ヨハネによる福音書』1:27、『使徒言行録』13:25を参照。
- 31 ウルガタ版では、「私はあなたから洗礼をうけるべきなのに、あなたが私のところにいらしたのですか」。
- 32 『申命記』19:15、『マタイによる福音書』18:26、『コリント人への手紙二』13:1、『ヘブライ人への手紙』10:28を参照。
- 33 『サムエル記上』17:49-50を参照。
- 34 以下のアクロスティックは『シビュラの託宣』第8巻 217-243 行に対応するが (*Oracula Sibyllina*, ed. Johannes Geffcken, Leipzig: Hinrichs, 1902, pp.153-157)、アウグスティヌス『神の国』第18巻 23章に見られるラテン語訳に基づく (Augustinus, *De civitate Dei*, XVIII, 23, ed. B. Dombart et A. Kalb, Corpus christianorum 47-48, Turnhout: Brepols, 1955, pp.613-614)。
- 35 クオドウルトデウス『神の契約と予言の書』(*Liber promissionum et praedictorum*) 第3巻2章 (ed. R.Braun,

- Opera Quodvultdeo Carthaginensi episcopo tributa*, p.157)。
- 36 同上第3巻3章 (ed. Braun, *Opera*, p.158)。
- 37 アウグスティヌスでは「身体と地上を裁くために」。ただし、『神の国』の複数の写本においては、「身体において……」となっている。
- 38 『神の契約と予言の書』第3巻4章 (ed. Braun, *Opera*, p.158)。
- 39 同上第3巻5章 (ed. Braun, *Opera*, p.159)。
- 40 同上第3巻13章 (ed. Braun, *Opera*, p.164)。
- 41 同上第3巻6章 (ed. Braun, *Opera*, p.160)。
- 42 同上第3巻40章 (ed. Braun, *Opera*, p.183)。
- 43 同上第3巻7章 (ed. Braun, *Opera*, p.160)、第3巻15章 (ed. Braun, *Opera*, p.165)。
- 44 同上第3巻29章 (ed. Braun, *Opera*, p.173)。
- 45 同上第3巻19章 (ed. Braun, *Opera*, p.167)。
- 46 同上第3巻46章 (ed. Braun, *Opera*, p.188)。
- 47 同上第3巻1章 (ed. Braun, *Opera*, p.157)。
- 48 同上第3巻1章 (ed. Braun, *Opera*, p.157)。
- 49 同上第3巻29章 (ed. Braun, *Opera*, p.173)。
- 50 Ἰησοῦς Χρῆστος Θεοῦ υἱὸς σωτήρ. 『シビュラの託宣』のギリシア語テキストにおいては、アウグスティヌスの引用した詩句に7行が加えられており、その冒頭の文字を繋げると σταυρός すなわち「十字架」となる (*Oracula Sibyllina*, VIII, 243-250, ed. Geffcken, p.157)。
- 51 以下、アウグスティヌス『神の国』第18巻23章 (ed. B. Dombart et A. Kalb, p.615) による。この託宣群は、ラクタンティウスに『神学教理』第4巻18・19章に散見される『シビュラの託宣』からの引用をまとめたものである。
- 52 アウグスティヌスでは「不信なる者の不義なる手」。
- 53 ラクタンティウス『神学教理』第4巻18章15 (Lactantius, *Divinae institutiones*, IV, 18, 15, ed. S. Brandt, *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latiorum* 19, Wien: C. Geroldi Filium Bibliopolam Academiae, 1890, p.352)。『シビュラの託宣』第8巻287-290行 (ed. Geffcken, p.160)。
- 54 『神学教理』第4巻18章17 (ed. Brandt, pp.353-354)。『シビュラの託宣』第8巻292-296行 (ed. Geffcken, p.160)。クオオドウルトデウス『神の契約と予言の書』第3巻21章 (ed. Braun, p.168)。
- 55 『神学教理』第4巻第18章19 (ed. Brandt, p.354)。『シビュラの託宣』第8巻303-304行 (ed. Geffcken, p.161)。『神の契約と予言の書』第3巻4章 (ed. Braun, p.158)、第3巻25章 (ed. Braun, p.170)。
- 56 アウグスティヌスでは「心を」。
- 57 『神学教理』第4巻第18章20 (ed. Brandt, p.353)。『シビュラの託宣』第6巻22-24行 (ed. Geffcken, p.92)。
- 58 『神学教理』第4巻19章5 (ed. Brandt, p.361)。『シビュラの託宣』第8巻305-306行 (ed. Geffcken, p.161)。『神の契約と予言の書』第3巻27章 (ed. Braun, p.172)。
- 59 『神学教理』第4巻19章10 (ed. Brandt, p.353)。『シビュラの託宣』第8巻312-314行20 (ed. Geffcken, p.162)。『神の契約と予言の書』第3巻30章 (ed. Braun, p.174)。